

冷静と情熱の人、石井洋二郎さんを送る

鈴木啓二

石井洋二郎さんというときまず思い浮かぶのは、彼の美しい字のことだ。教養学部報の「駒場をあとに」欄に石井さんが書かれた文章、「さよならコンサート」に添えられている「ご本人直筆」は、わざと芸能人の色紙風に俗っぽく崩してあるが（それでもなお全体で美しいカリグラフィーとなっているところがさすがだ）、私が折に触れて目にしてきた、紙の上に記された彼の文字（付箋に記した伝言、書類に付したメモ、いただいた著書の短冊の自署）は、いつも端然として優雅で、石井さんの人柄をよく表わしているように思えた。

彼の文章もまた、端然として澄明だ。彼はいたずらに抒情的な文を嫌う。以前、石井さんをチーフとした科学研究費補助金の申請をした際、私が提案したのは、「フランス第三共和制の光と闇」というタイトルだったが、余計な枝葉で「効果」を狙うタイトルのように彼の目に映ったのだろう、彼はそれを、修辭ゼロの、「フランス第三共和制における文学・政治・宗教」と改めた。

石井洋二郎さんと接する時、その、いまや名人芸の域に達した諧謔^{だじゃれ}や、当意即妙な切り返しや、時に辛辣な言葉の背後に、私がいつも感じるのは、この静かさだ。

この静かさは、しかし、単なる無害な穏やかさとは異なる。石井さんの最新の著作、『告白的読書論』において、彼の語りは、時に平俗ぎりぎりまでに平明で、淡々としている。が、子供時代以来の彼の読書遍歴を語ったこの本でとりわけ力をこめて言及されるのは、ブロンテの『嵐が丘』が発散する「暗い熱」であり、サドの即物的暴力であり、夢野久作の狂気だ。石井さんの、均衡にみちた文体は、そこで、絶えずそれら荒々しい力の揺さぶりを受けている。あるいは、この文体は、それら荒々しい力や聖や俗を全て含み込んで、不思議な中性的沈黙を湛えているともいえる。

こうした、石井さんの静かさと熱気、冷静さと情熱を前にする時、石井さんが研究の対象としてロートレアモン（本名イジドール＝デュカス）を選ばれたことが、ごく自然に納得できる。デュカスこそは、悪の権化マルドロールが繰り広げる、反抗と暴力と侵犯の物語『マルドロールの歌』の作者であると同時に、悪や悲嘆を否定して、善や期待や平穏、幸福、義務を淡々と肯定する『ポエジー』I、IIの著者でもまたあるからである。石井さんはこの難解なデュカス＝ロートレアモンの文章を、あらゆる力を内包しながらも、隅々まで冷静さに貫かれた見事な日本語に置き替えることで、歴史に残る名訳を成

し遂げた。

この翻訳を進められていた、世紀の変わり目の頃、石井さんは丁度大学で専攻長を務めていた。訳者のあとがきには、次のような箇所がある。「折しもその年度から勤務先の大学で一定の責任を負わねばならない役職についていたこともあって[……]、なかなかまとまった時間を割くことはできなかったが、それでも怠惰な私としてはめずらしく毎晩帰宅すると必ずパソコンに向かい、一行でも二行でも仕事を進めるのを日課とした。空転する会議やおびただしい雑用で心身ともにむなしく磨耗していくことに切実な苛立ちを禁じえなかった私にとって、それは苦しいながらも密やかな愉悅のひとつときであり、この充実した時間のおかげで散文的な日常とのバランスが辛うじて保たれていたと言っても過言ではない。」

初めてこの箇所を読んだとき、私は一抹の疑念を抱いた。この難解で毒にみちた作品を相手にした時、翻訳中に、まるで瘴気にあてられたかのように二度も病床に臥したという、現代思潮社版『マルドロールの歌』の訳者、栗田勇氏の呻吟の方が、より自然であるように感じられたからだ。しかし、今では、石井さんの書いていた話は、完全に信じられる。彼は、機械的な冷たさに満ちたデュカス＝ロートレアモンの毒や暴力を、極限の情熱を内包した、あの澄明な日本語へと、ひとつひとつ念入りに移し替えていった。困難な翻訳の作業を愉悅へと変えたのは、まさしく、この石井さんの「冷静さへの情熱」(モーリス・ブランショが、『ポエジー』を評して用いた表現)であったのである。

石井さんはその後、2008年には600頁近い大著『ロートレアモン越境と創造』を刊行し、翌年この著作で博士号を授与されている(私もその審査に加わらせていただいた)。テキストと実人生の双方に、「越境」という共通のテーマを見出し、種々の越境が、詩人ロートレアモンの豊かな創造へと結びつく過程を詳述した、日本で初めてのこの本格的なデュカス＝ロートレアモンのモノグラフィーは、質量ともに充実した大作であった。

その後も石井さんは着々と仕事を積み重ねられた。この文章を書くに際して参考にさせていただいた石井さんの業績はA4用紙17頁に及ぶ。扱われている対象は、ブルデューから宮沢賢治まで、丸山眞男からロラン・バルトまでという、驚異的な広がりをもつ。一方、大学人としての石井さんが、専攻主任、駒場図書館長、学部長、副学長、理事等といった要職を歴任され、現在なお華々しい活躍をされていることはいまさら述べるまでもない。

石井さんは、最近のある対談の中で、究極の真理の不在、という点に言及しておられた(『UP』、2016年11月号)。「真理の罷免」は、既に、石井さんのデュカス＝ロートレアモン論の中核をなすテーマの一つでもあった。そしてここ数年の彼は、こうした価値相対性への確信の果てに表れる信念とでもよぶべきものによって、行動と実践へと駆り立てられているように見える。専門教育の後に、あるいはそれと同時になされるべき「後期教養教育」への積極的コミットメントや、平成27年6月の文科大臣名の通達に端を発

した大学教育をめぐる議論における、彼の、熱のこもった、人文科学擁護の発言は、最近の彼の、行動と実践への志向を表わす好例だ。石井洋二郎というこの明るいニヒリストが、冷静さと情熱に満ちた、その驚異の疾駆の速度を緩める気配は全くない。

石井さん、どうかいつまでもお元気で。